十一・四の証言とその考察

巻頭言

この罪を打つ者よ一時の死に至ると知れ
闇より細々と輝きの出でるを見ると知れ
自らが埋葬される安定感を味わうと知れ
毒とも紛う透明な戦慄の中に酔うと知れ
緊張の快い吐息の中で人間であると知れ
浮き上がる生命の燃え尽きる時だと知れ
この異質なる夢は異端として死すと知れ
この罪を打つ者よ死に至りて狂想と知れ
この罪はキンキラキンと輝くのだと知れ
そして暗黒へと帰る自分の哀れさを知れ

11・4の証言（全文）とその考察

11月4日に生徒大会席上で行なわれた生徒会論を、全文（原稿のまま）ここに掲載し、さらにそれに小論を加えてみた。

これは飯田高校生徒会の現状と、その方向に一つの役割をはたし得ると自負している。

この拙文を何らかの形で利用して頂ければ光栄である。

生徒会の明日を期待して記す。

長野県飯田市小伝馬町　二
坂井明久

一九六七年十二月十日　発行

11・4の証言（全文）

飯田高校生徒自治会の現状を隠す所無く述べて見たいと思います。今まで我々が気付かなかった何かに気付いて欲しいと思います。

まず生徒会の役員になる事は犠牲でした。かって菅沼会長が、誰も立候補者のない会長の役を、先生方より依頼されて引受けた時、御両親が、たとい勉強に影響はあっても皆さんの為に精一杯やらしてもらいますと心を決めて先生と話をなさったそうです。

この様な、受験を一方に置いた立場に生徒会全体が存在しています。

我々の大多数は今問題になっている様に無関心です。はっきりと生徒会が邪魔になっている人さえいます。ここを非常に理解なさっている先生方は、絶大な理解を持って生徒会に協力して下さいます。

余り生徒会が遊び過ぎても困る。進学の邪魔では困る。けれど生徒会がなくなっても体面上から、教育上から困る先生方は、生徒会の現存による犠牲を最小限に食い止める努力をしています。

受験の圧力への憤懣や苛立ちを和らげて、かえって生活の張りを与えてくれる生徒会、その生徒会が受験に役立つように先生方はなさろうとして色色の事をしました。

四十二年度役員選挙の時、当時二年の学年会の先生方が選挙に於て工作を行われて、すでに二名の候補者が居るにもかかわらず会長と選挙管理委員長が会長推立をもくろみ日程上の変更を数たび会員に無断で行った事や選挙規定に違反した事実がありました。

そしてその不正行為をあばこうと署名運動を起こすと、その署名を起こした主導者の各H・R担任の先生方から一人一人に止めるようにと注意がありました。（注・この時の自治委員会は流会）

この時自治でない自治のカラクリが良く理解できました。先生方は生徒の自治に様々な手の出し方をします。どうやら自治にはあるワクがあって、その秩序を保っている生徒会になる様に心配して下さっている。受験の為に見させておく夢としての生徒会、にしておこうと先生方は尽力下さっています。

旧執行部発足当時（注・坂井は爆弾で何をするか判らないと言うのが先生方の心持だったようです。）進路指導の先生から、「あまり生徒会に夢中になって勉強を忘れるな」と忠告を頂いたり、（注・おそらく仕事の役目上からだと思います）「いくら君だけ飛ばしても他の人も居るのだから」と好意で言って下さったりもしました。

でも、この点に奇妙な所があります。自治のない生徒会から脱しようとしているのに、何故止めようとなさるのでしょうか。

先生方の矛盾する態度の事例を上げて見ます。

「はたしてそれを、会員が望んでいるか。」と言うのが先生方の決り文句でした。何か一つ事を起こす時には必ず「はたしてそれを、会員が望んでいるか」と言われます。職員会でもその点が常に問題になります。

いったい飯田高校に、望んでいてやっている物がありますか、ないのです。どの行事も企画されてそこにあるのです。ただそれに従っているのが今の姿です。

H・Rをまわって、何が問題の核心かも判らず、ただ批判する会員の姿を見せられ、執行部と語る会には十三名しか出席がなく、高松祭の中の文科会の、生徒会についてと言う会場への参加希望者が十名に満たないと言う結果を知る時、会員は生徒会に望む事を言える状態にないと言わざるを得ません。

この状態の中ではたして「会員がそれを望んでいるか」と言う問に何の意味があるでしょうか。先生方は一つの形式を求めているとしか言えません。民主的なルールに乗取っている形を踏む事を求めているのでしょう。

ところで、先生方がはたしてと問うのは、運動会のような保守的な傾向を破るものを行なおうとする時なのです。

運動会の時の現実は大変愉快です。

執行委員の一挙一動を観察なさって運営可能か不可能かを判断なさった先生。クラスマッチの方が良いではないかと宣伝なさった先生。運動会の役員になると決まった男にこの仕事から手を引くようにと助言なさった先生。執行部に来て絶対失敗するなと注意して下さった先生など大様なものでした。（注・この頃の三年の学年会で、坂井は人格的には良いが実行力が心配だと言うのが定説でした。）

職員会では運動会反対と大勢が決まりました。それはそれで、御理解を示されて、生徒会のやる事には、とにかく協力すると言う事でしたので、運動会には多数の顧問の先生方に付いて頂きました。結局全体での連絡会はただの一度だけと言う成果でした。（注・運動会の備品等どこにあるのかも判らず、応援旗や優勝旗も使えませんでした。）

こんな例をもう少しあげましょう。

校風委員会で、オートバイのヘルメットを被れと言う決まりを作りました。そして、その調査も校風委員会で行いたいからと学校に申し込みました。ところが、校風とは無関係に二度も先生方は調査なさいました。

落語がクラブに昇格した時の事です。落語は運動でも学芸でもない。だからクラブと言うのは可笑しいと、昇格の決って後から執行部に注意が来ました。同好会のうちに、顧問の先生なり通じて指導するならともかく、それを後になって「会長判断で押さえるべきだ。」と言う指示を受けるのが本校の妙な所です。

先生方の色々な干渉によって、生徒会があろうとなかろうと先生方の思い通りになってしまう危険性がここにあります。先生の思い通りでも、会員が大多数それと同じなら良いのですが、会員は、まったく無関係だとは皆の指摘する所です。

生徒自身受験にしっぽを巻いてしまって、刹那的で享楽的で打算的です。

今の生徒会行事は娯楽、レクレーションです。とにかく現実生活の中で自由らしく振るまう事さえ出来れば良いのです。

強歩大会の完歩率は非常に高かった。すばらしい事です確かに個人的勝負には強い。だが、全体で本当にまとまる事なんて出来ない。強歩の完歩は自分に満足を与えてくれ、自分の利益になり自信になる。だから皆行くのです。どの生徒会の行事もこの個人の喜びをぬきにして考えられません。

運動会がまとまった。辛うじてでもまとまった。これは自分らの高松祭を壊したくない、夢を奪われたくない、という気持がそうさせたと言えます。

正体を暴露して、不安な、圧迫された自分を晒したくないと言う潜在的な意識と、享楽的な場当り主義がそうさせたと言えます。受験がある。その中で人間的なものもあると嘘を信じたい心から出来たものです。

先日、H・Rが大切だと言う意見が生徒大会で出ました良い意見です。でも、そのH・Rが何故大切なのでしょう。

(注・この時二、三の級で担任が、L・H・R(ロング・ホーム・ルーム)を使うのは変じゃないかと生徒に言ってそのH・Rの生徒がこの意見を出したのもあったようでした)三年生にすれば、日頃の不満や焦り、そう言ったものの捌け口として、憩いの場として必要なのです。

ホームルーム、そこではバラバラな個人、もしくは数名のグループが勝手に喜びを見つけて安心している場なのです。

二年生にとってみればホームルームは唯一の高校生活に入って急に自由になった、と同時に進学だ進学だで授業中など人間的な触れあいができない、だからホームルームをより充実して工夫も一段とましていると思います。しかしそれも、一部の指導者が上手に個人的利益の妥協点をみつけ、一人一人喜ばせてひっぱっているだけですそして、その安易さにいつかバラバラに崩れているホームルームへと変わっていくのです。指導者の自己満足です。ルーム長は、みんなが楽しめる知的遊戯の討論会や、運動をして皆が乗ってきやすい、平穏無事なルーム運営をしなければならないのです。(注・この文をきいてあるH・Rで試みにばか騒ぎして成功したということです。)

ホームルームは安息の為の神聖な場所なのです。それをなくせば、子供からおもちゃを取り上げるのと同じなのです。

先生と生徒の接する場所がホームルームです。しかし多くの先生もその神聖なロングホームルームを特定な仕事以外はできるだけ生徒の自由にさせておきます。そうしなければ生徒も不満になるし、先生にも負担はかかるから当然です。まれに何か新しいアイディアでも出して、みんなでエンジョイできる事を試みる先生もいらっしゃいます。しかし、先生の家庭に遊びに行く生徒も少ない現状では、そんな事でもして生徒と結びつかなくては絶対にはなれたままでしょう。先生方の中に特定の数名とだけ接触を多く持つ方がいるのもやむをえないと言えます。

とにかくホームルームはバラバラなのです。ことに男ばかりのホームルームは好きかってな事を言い合い、同病相あわれむでなぐさめあって、適当に憤懣を処理する事が出きる。それも数名のグループの中で、おかしくもない事で楽しめる。いかにも人間的なふれあいを感じられる。女子のいるホームルームが比較的まとまっているかの如く見えるのも、女がいると不思議にそうそうできないからでしょう。ホームルームで自分が楽しめない人は、クラブに、委員会にとそのごまかしのはけ口を求め、それでもできない人は、ただ自分の中にとじこもることになってしまうのです。サッカーのクラスマッチで三クラスとも女子のいる級が優勝したと言うのもこの問題に一つの指さをしています。

三年になるとコースがばらばらになり、ホームルームの時間の時だけみなの顔がそろう実情です。だから、ますますつながりがなくなってしまうのです。先生方はこれでもホームルーム活動をしろとおっしゃるのがぎもんです。

こういった現状を生み出している最大の原因は本校の教育不在にあります。

弁論大会後女子の帰宅時間が問題になりました。日没に帰るようにと生徒指導の先生はおっしゃりました。女子はそれに反対しました。今、それを口に出す人はありません。この間11月1日に生徒指導の先生から出たぐらいです。この我々の態度は後でふれますが、実質的にこの決まりはそれ程の効力がないのです。

先生方は、女子出席のコンパ等は、先生の責任のもとに法を破る。日没後でも出席をしてよい事にする。先生方は生徒に情を示されているようですが、職員会ではいけないと決める。自分で日没にしろと決めておいて、一方では、甘い顔をする、生徒にいい顔をみせる。これが一つの事実なのです。

生徒への思いやりとは言いながらあまりに個人的で妙に情実的ではないでしょうか。

酒を飲んで醜情になった生徒が出たと聞きました。しかし先生は個人になられると、卒業すれば一杯やろうとおっしゃいます。公の立場では教師として、私的な場では人間味を出す。ジレンマを感じます。

学芸班室でさぼっている者がいました。それを見つけたある先生曰く、ちゃんと勉強しているんならいいが、班室で遊んでいてはいけない。単位数が足りなくなった生徒に注意なさったある先生、「他の、重要でない科目をさぼって、俺の科目はさぼるな!」という話。受験だからこういう授業になっても仕方ないとおっしゃいながら、すぐ個人的な体験を話にのせる先生。

この、不思議な飯田高校の教育こそ飯田高校生をねじ曲げている本質ではないでしょうか。受験という意識で我々を圧迫しながら、一方、妙に情をこめるこの態度を打破すべきです。しかし、先生方も受験の犠牲者なんです。先生はおっしゃいます。

「我々は教育労働者なんだから、矛盾と判っていても仕方ないよ。」

「こんな学校にいると何か失われていくみたいで。」

「そりゃお前さん今なんて変だよ。でもしょねえじゃん。俺だっていいかげん嫌になるさ。」

「でも受験ずら、だからこういう勉強も仕方ないんな。そんな事言ったって受かるの。お前さん。」

「確かにおかしいさ、でもどうにもならねえんだよ。」

「たとえ小さな目標でも入る事さ、それしかないんだ。今はいっしょうけんめいやってとにかく入る事だ。それしかない。」

誰も彼れもおっしゃいます。先生方も被害者である。それも事実なんです。

しかしとにかく今の受験体制の中で我々はたましいを抜かれてしまっています。おどおどおびえて何一つ自分をしぼろうとしない。

このうち劣は落第だと入学そうそうぶたれたり、高校は中学と違うと言う事をあまりに強調された結果、純粋な心がいつのまにかそれだけで埋まってしまうのです。土テストや模試に追われ、志望校だ、コース編成だと言っているうちに去勢されてしまっています。

今の生徒会の中で崩されていく人間はあまりに大すぎます。

生徒会に熱心で理解のある友、それが高松祭の時に、「君は受験勉強があるから役員になるな。」と言われ、それを肯定せざるを得なくなって、私に生徒大会に出ろと言われても、苦しみながら帰ってしまった友。

生徒会役員の立場にあって、受験に追われる自分がふがいないとなんども泣いた友。

みんなみんな苦しんでいる。何が苦しますのだろうか。

橋北橋南のコンパでお説教がありました。

なぜお説教をしたのか私にはわかりました。自分達が精一杯やって、なお失敗し、いつの間にかねじまがっている姿、どうにもならぬあやまち、あせり、不安、やりきれなさ、それが判らずのうのうとしている二年生のふがいなさ。みんながまじってお説教になったのです。

二度とお説教すまいと誓っても、それをせざるにいられなかった気持が良くわかるつもりです。お説教をサディズムでする人間は別にして、お説教なんて、我々の三年生の出来る最後のさけびなのです。される一、二年生は三年生を軽蔑し、反感を抱く。それでもしなければいられないのです。もちろんその事には批判をしても、その気持には何も言えません。

その時にある先生がおっしゃった。「郷友会の全員参加が問題だ。自由参加にしたらいい」、と、私は思いました。なんてわからない先生だろう。お説教をなくしたかったら自分等の妙な教育を止めたらいい。受験教育と言いながら適当な人情とごまかしをミックスしたにせもの教育を止めたらいいのです。

それも判らずにお説教を考えているから駄目なんです。PTAがうるさくなった、その口をふさがせる事をあくせくするより、もっと本質的な物を考えてほしい。教師なんて教育的で、教訓的でその実なんにもわかっていないのです。そして我々は一人一人の先生を見て何かわからないのになっとくする。アメにだまされる。先生自身を苦しんでいる、なんにもできない、しようとしない、自分だけの世界で喜んでいます。

落書にしてもそうです。校風委員会が予算オーバーしてまでサンドペーパーを買ってこすってみたってなくなりはしないのです。私の友人に、いくら注意しても落書をかくやつがいます。いや注意するとその時はやめます。しかし又いつの間にか書いているのです。

我々の他にも自由のない中で、そこに机があって手にペンがあれば落書がかける。不自由な世界が好きなようになる。美人を手に入れようと先生をやっつけようと自由なんだ。私は落書を認めません。ただ落書は失なわれていく人間の象徴なんです。これをなくすにも、根本からかえなければなりません。

しかしこの事に誰も気付いていないのです。気付いていても何もしていません。

劇の時、紙飛行機がまった。これもレジスタンスだ。それを抵抗と呼ぶにはあまりに弱い抵抗なんです。誰も見たいと思わなかった劇、学校から急に贈られたほしくなかったプレゼント、それでも見に来るしか仕方のない我々、紙飛行機というたわいないもので喜び劇そのものをバカにする、これがレジスタンスなのです。けれどそれはあくまで全員まとまってのものでありません。

例えば女子が何故遅くなるといけないか知っていますか、女子が襲われるというのは表むきの理由で本当は、家から電話がジャンジャンとかかってくるという理由なんです。

旧執行部の仕事が遅いと女子を帰せと自治会事務室に電話がかかってきました。しかし役割と位置づけをすましたら今となれば新の執行部の女子が、何時に帰ろうがあまり何も注意がないようです。

この矛盾だって誰も突こうとしない。まとまって突けない。それだからますます無関心になっていくのだと言えます。

こうしたバラバラに崩れていく人間の中で生徒会はどうやってなり立っているか、先生方の御理解、御指導と、犠牲的精神と、変な個人主義とでなり立っています。

まず、生徒会を自治体として真剣に考えている犠牲者たちは、だれ一人自分が犠牲だと信じません。そこにかわりの価値を置きます。

「人間形成、自己形成」というすばらしい得体の知れないあいまいなものを支柱にするのです。

「たとえ、一期校に入る事ができなくたってこの仕事の方が人生に役立つはずだ。」こんな思想な人間から生徒会がなり立っているのです。もちろん彼等は進学をあきらめているのではないつもりです。ただ時間を少しそこにさいているだけなのです。

生徒会の第二のカラクリは、ここにあります。この僅かな犠牲者数名の手だけで動いています。有能な委員長を動かさない事には生徒会は動かないのです。

自分を投げ出した献身的な連中によって生徒会は動いているのです。

これと別な会員の中には排泄作用として活動している人もいます。役員を生活のレパートリーの一つとしている人余裕のあるかの如くみせかけ、自分は青春を過ごしているんだと思いこむためにやっている人もいます。

あくまでゆとりとして、だから、絶対自分がそれに困らないように、いつでも逃げだせる位置にいる人もいます。

クラブ等は自分の世界を作る為にあるのです。そこには仲間がいる。いかにも高校生活らしくなる。会話ができる。大人ぶれる。あのホームルームと同じ参加の形態があるのです。中学時代、生徒会にたずさわってきた人間にとってそれを忘れなければならない程追いつめられていると信じたくない表れだと言えます。

そしてさらに悪いのは何にもかかわらずにいると言う人間です。

昼食の時間に誰がどこでどうやって食べるかを思い出してみてください。どこにも住む所のない飯田高校がわかるはずです。ここにまでバラバラな現象はおよんでいるのです。

ここでもう一歩深く突っこんでみたいと思います。

職員側の教育不在をあげましたがもう一度考えてみましょう。先生方は今の生徒に対してこうおっしゃいます。

「先生はね、研究室にどうして遊びにこないか不思議なんだが。」「こっちで一生懸命やっていたって生徒の反応

がないもんだから嫌になっちゃう。」「もっと元気がいいと思っていたが失望した。」「先生にかみついてくる気迫がない。」「授業中はみんな静かになって下を向いてしまう。」

何も我々の無関心無反応は生徒会ばかりでなく授業中にも及んでいます。いや、この方がもとになっているのです。先生方は生徒と接したがっていらっしゃる。そしてその場は授業中なのです。ところが生徒は気が抜けている。頭をなぜられてちぢこまっているのです。また、研究室に生徒がきてほしいのも事実です。もっとも、「受験のためになるから先生に接しろ。」とおっしゃる先生もいるようですが、大多数の先生は違います。

今の我々に強い生命力がない事こそ最後の原因です。

自治委員になるのは犠牲だからなるのは嫌だと言った一年生。応援団になるのが嫌だとなかなか決らなかった二年生、応援団から抜け出すために工作をした一年生の話、みんなこのなんにもかかわらずの典型です。自分で何を改革するという気持もなく、ただうろうろと逃げまわるこれこそ厚田高校のガンです。

読書しろ読書しろと先生は言うが、今の追いつめられた我々にそれが出来るかと食ってかかった二年生、僕は頭が悪いのでクラブに入りませんと言う一年生、どこに人間だと言う叫びがあるだろうか。

ここで二つの先生の言葉を引用しよう。

「生徒会と受験を両立する力もないような事では受験にだって勝てない。」「問題集の答をうつしてとにかくその場をつくろっても本当の力にはならない。」

戦う以前に自分に敗けている姿、もうなにもかも失って人間である事すら忘れてしまった会員、これが無関心の正体なのです。

ツルとかタコとかカラスとか何にもセンスのないあだ名を付けて喜んでいる。小学生でも恥かしくてつけられないような無意味なあだ名をつけている。先生を知らなくてもあだ名だけは知っている。ここにおかしさがあります。

なぜそんな享楽を求めるか、自分自分で考えて見るのだって立派な関心なんです。

先生のところに行って自分の考え方を述べるのだって立派な関心なんです。

ただここにニセインテリが入り込んでくる、ここが又別な問題なのです。沖縄でもそうだったように、いかにもそれを知らなさゃならないという顔をして便乗してくる人がいる。ただ背のびしたくてインテリぶりしたくてしようがない人がいる。ことに女子に多いのも一つの面です。

無関心者、犠牲者になる献身的な人、ニセインテリ、利己主義者、完全に分裂を起こしています。

10・26についての会が11月1日に持たれた。あの大きな騒ぎ新聞を見てどう思いましたか、「おやまあ、三年生がいい歳をして、もう入試も近いっていうのに御苦労さまな事だ。きっと立おくれたのではないのかしら。」「あんなものをものずきに作って変な人もいるものだ。まあ御好なように。」こう思いませんでしたか。

だがちがいます。彼等は気付いたのです。このまま受験に入るには入り切れない何かがあったのです。圧迫されっぱなしでズルズルズルと自分がないまま入試に入っていったら、もう自分が死んでいる事に気付いたのです。

だから、あの会を持って民主教育を語って、少なくとも能動的な姿勢で入試に望もうとしたのです。そうしておもい切れると信じたのです。

まだ若い彼等です。先生方の複雑な立場など理解できようはずもないのです。先生にすれば、政治活動はこまる、かと言って関心は持ってほしい。こんな事を彼等に考えろといったってむりです。だけど彼等はやった。11月1日に必死でやりました。

ところが、彼等は追いつめられたねずみでした。自分のふぎれのない気持に追われ、生徒の中の無理解に追われ、白眼視され、にせインテリに便乗され、いかにもそこだけに生活を求める連中に利用され、そして教育について語ろうとなさる先生にも教訓を与える場所を作って、あげくのはては元気がないと言われて、やっぱり追われたねずみはねずみにしかすぎなかったのです。しかし、誰一人彼等をせめる事など出来ないはずです。

彼等には主体性があった。たとえ追いつめられたねずみでも、それはしょせんしなければなりません。だけど今の生徒会の現状の中で彼等は何故英雄になれなかったのか考えて見て下さい。

それは我々が自分達の心の中の何か大切な物をおしころしてしまっているからです。

前に気力がないと言いました。さらに言うなら高校生でない、若者でないと言えます。あたり前の結論のようでいて、自分達がどのように自分をだましているか考える事を今までおこたっていました。もうやめなければ生徒会はなり立って行きません。

執行部のプリントの中に全体の利益という言葉がありました。

全体の利益とは我々個人々々の生活の改善なのです。今まであげた、女子の帰宅時間、ホームルーム活動、交通とりしまり、人間らしい生活、誤れる教育への批判、これが全体の利益なのです。変則的な、男女共学、自分達自身のもつ落書、お説教の問題、行事日程の面、どれもこれも我々が全体で主張すべき問題です。

今まで一つとして会員がつかみ取った物がありません。みんなお与えの物です。先生方からいただいたものなのです。

今年の一年生は英語の能力別編成をしないと言います。これも先生方の取ったアンケートの結果として与えられたものです。受験にのぞもうとしながら能力別編成をさけたいという気持にも問題がありますが、先生方によって与えられたという点に注目できます。

飯田高校程、上下の差がある学校は少ないと言われます。その中で、生徒の気持をくんでくださった理解ある先生に敬意を表すにしても、我々は何をしていましたか。ただ口を開いて、たなの中で待っていただけなのです。こじきです。まるでこじきです。

受験するのは我々なのに、まるで人さまかせで、自分から首になわをかけてつき出しているのです。だから先生方は、とまどいながら生徒をひっぱろうとなさるのです。

生徒大会が流会になった。その後の生徒大会で無関心が問題になった。たちまち学年会が開かれて、どうやってスンナリ二年生にゆずるか心配して下さる。そして我々を指導して下さる。

10・26の時もすぐ職員会で、これは三年生の問題だから三年の学年会でと、責任がうつされ、顧問の先生もついて下さった。

そのくせ今日補習をやっている先生もいらっしゃる、三年生にもなっていまさらどうするとおっしゃる先生もいらっしゃる。首になわを付けて違った方向に同時にひっぱられてキュウキュウしているのが今の姿です。

自分の科目や、ホームルームや学年のばつにこだわるセクト主義、その中で生徒会は右おう左おうし、会員は、酔ってしまっています。

私には判らない点が一個所あります。今の会員は、自治が本当にしたいのか、生徒会について全員で話し合う程価値が生徒会にあるのかという事です。

今の現状のままでは犠牲者が出るばかりです。

マッチ箱の中に閉じこもっている会員と、生徒には甘い顔を見せ、かと言って受験だけはとキョウキュウする先生とどれ程の差があるでしょうか、同じ穴のムジナです。

これから我々がすべきことを言います。

生徒会もまあまあ、受験も大切と両立させたような顔をしていつでも受験で逃げ出すあいまいな態度を止める事です。

つまり、自治が出きる状態にないと宣言し、いままでかくしてきた事を暴露して生徒会を自治会から事業機関にかえるか、自治を行うと宣言して、いままでの問題を処理するかのどちらかです。

もし、進学体制を望むなら純粋な予備校化を全会員が望むとこの生徒大会を声明して、今までなめていたアメを口からはき出して、にがい薬をのむべきです。そして事業執行機関では、仕事をして生活のはりを持ちたい人間に活躍してもらい、程々のレクリエーションを与えてもらえばよいのです。クラスマッチだって強歩だってそれでできます。そうすれば不満の解消もできるし、無関心だなんておい目を感じて勉強しなくたって、俺は、一番正しい事をしているんだって自信を持ってやれるから、不安もなくなるはずです。

又、もし、自治を望むなら先生方に対してあらゆる干渉正式な質問を通じない干渉をはいせきし、我々の現状改革の為に決議文を出すべきです。

先生と生徒の接触の場をもつ事、生徒大会当日に補習などしない事、ホームルームの時間を長くする事、女子の帰宅時間などの問題を生徒会の立場から考える事、クラブを立てなおすこと、コース別編成の時、生徒と相談することなど、みんなで考え、実行すべきです。

そうなれば自治の悪夢に酔わされた人間は、先覚者となり、迷っていた我々も人間らしくなったとほこりを持ってぶっつかれます。

生徒会をはっきりと位置づける、それをこの生徒大会で行わねばなりません。

それもあんな大義名分論や、現実論ではなくて、全人格を一人一人がかけてきめなければなりません。

11月1日の会でもそうでした。先生方が教育に全人格をかけられ、一生かけられた意味での発言を出されたのに対し我々は、小手先の言葉で意見を出しました。

もはや、それでは駄目です。こうなってくれてはこまるという叫びが決定して、はじめて解決がつくのです。

この間、「阿呆丸の船出」の劇の中で、誰からも、しめ出された三人が船出するシーンがありました。それを正しいと認めながら、のらない友がいました。

あまりに似ています。今こそ乗るにしろ乗らないにしろきめる時なのです。

生徒会執行部としてなすべき最大の事は、執行部の一人一人が大学に受かる事だと言われ、私も信じています。それは、生徒会をやっていると、成績が落ちるという事実を克服しなければ生徒会が存在できなくなるためでした。

もし会員の心の中にその不安が生まれたら生徒会が崩れてしまうからでした。

しかし、私は、全員が、その努力をすべきだと思います。一人一人がみんなでそれと戦うべきだと。

ともかく、自治か行事か決定をするよう要求します。

※注　本文中で補習の事を書いたが、先生方は当日生徒大会の為に中止をして下さった。我々は観念的に何かを壊うが、嫌悪すべきは自分等でないだろうか。先生方の補習に於ける尽力を思う時、私など申し訳ないのであるが、ここではその事は触れない事にしておく。ただ、先生方への感謝をこの所に記しておきたい。

考察 … 飯高生論 …

飯高生の特徴は横に仕切られた壁の中に一人づつ入っていて、そこからピョコリピョコリと顔を出していると表現して良いだろう。

現状を認識してと言う場合、他人の語る現実を知る事でなく、それを一つの方法として自分の周囲の壁を発見し自覚する過程を通じて、はじめて認識となり得る。しかるに現実の飯高生は、第三者的思考しか行なわないで、自分の問題すら、抽象的な言葉で象徴される観念で転化してしまう。

中には未熟な自分を責めるよりは他人の真剣さを軽視してしまうか、それをドラマとして、見せ物として見るかのどちらかになる人間がいる。常に自分を外に置き、そこで思索するのでなく見るのである。自分の壁を見つめる前に他人のそれを見つめようとする姿を、見て楽しむのである。

壁と言うのは、不安定な状態をそれ以上不安定にさせまいとする意識である。相対的な人間関係を非常に重視するのが飯高生の特徴であるが、自分と他人の関係を崩さずに生活しようとする。その為に許し許され合ってしまう。私と言う個人が、どう他人とかかわって生きて行くかだけに目をむけて、全体や、集団への眼は閉ざされてしまう。その、他人と言うのは、一般に言う他人でなく、自分と同化する者、自分の指導者、自分の従属者と言った直接な関係を持った他人である。他人は不安定という状態を固定化させる。その他人が一つの役割以上の意味も拘束も持たないのは、その性格上当然な事である。

他人との相対関係も、集団との関係も、無の意味しか持たないのだが、人間であるという意識が、仮りそめの無を求めさせる。しかし必要なのは無だけであって、本質的結合なる煩わしき物は不必要であり、却って害をおよぼす物として避けられてしまう。

この横に仕切られた壁は、人間の不信と信頼を同時に意味する。

現状の認識を試みるためにはこのような壁を意識し、結びつかない自分を自覚する事が第一歩である。

無と無の中で、そこに無として存在し、自己の存在が他者へも社会へも何一つ与え得ず与えられずにいる自己を自覚する事だけである。如何に自分が友情なる膿の下に若者なる意味なき行動を行って来たか見つめるべきだ。今自分の隣りにいる人間が何故隣にいるか考える時、本来自分が作るべき人間関係が作られ、与えられ、その中でただ不安定を意識しないための努力をしていると気付くはずである。

生徒会を見つめる時本来自治の下にあるべき生徒会が同様与えられた物であると気付くであろう。その自分がそれに対し何もしていないと認識して何事かが生ずる。

高校生は自由でない事を嘆う。それはしかし眼に見える、過去の人間が人間の自由と定義づけた自由を形式のみ吸収してそれをあてはめて見るだけなのだ。そこに精神のかりものが多くありすぎる。

優等生的に与えられた自由を喜びに変型してしまうのも自由の放棄なのだと明記する。

自分の不安定な壁の中を守る姿から、その外を覗いてみる根性が生まれ、自分と社会を忘れた、ただ流れの中で生きていく態度が養われる。

受験体制は先生方の物であるかの如き錯覚もここから生ずる。一人一人は自分の生活、受験を人の眼の届かぬ処に

かくし、壁の中にかくし、自分の受験を論ずるのでなく人の受験を、先生方の指導を論ずるのだ。自己の壁の中と切りはなされた社会、これを打破するのが生徒会の無関心の撤廃なのだが、同様人にまかせる、人の問題として扱われてしまう。これでは駄目だ。

自己の存在に不安を覚える状況にありながら、あまりに平気でいすぎる。自分が教室から消えても、授業そのもの、学校そのものにどれ程の変化があるか。ただ他人の特殊な者が何情するか、おどろくかしてくれれば上等なのだ。その他人もどうであろうか。君は判り判らせているつもりになっているだけで、判っていず、判らせてもいないのではないだろうか。つまり、壁と壁の中で相互が誤解し、その誤解故、無に価値が生じているのだ。

壁があっても上があいている。ここにもう一つのガンがある。上を通る者が見える。自分は動けなくてもそれで動いた気持になる。他者の行動に自己を救うのである。これが壁に圧迫感を感じさせずにおくガンである。自分がその人間の壁を超克し、他人の壁を崩していく時、はじめて社会が出現する。

今の孤独をまず自覚せよ！

方法に話を及ばせよう。どうすれば超克できるか、それは総てをかけて他人と語る事である。壁の錯覚に誤解にだまされず、語る事である。相手がにせ物だったらそれを崩すのである。これだけだ。自分をズタズタにしておいて、その自分を切りきざんだメスで相手を、社会を切りきざんでいくのだ。つまり、自分をきざまなければ駄目だ。自己を分析して、その結論に疑問を持ちながら相手に語りかけていく事だ。

不安、それは生きようとした時生じる。自分であろうとした時生ずる。自分を落とし自分を無力だと知った時生ずる。そして、不安は、自分を例えば死に至らしたり、例えば困惑の余り考えこんだりすると言う方向へでなく、その逆の不安を克服し、その中で生きる喜びを見出し、さらに生命への炎をもやす種としてそれを生み出す根源としての不安である。天才は狂気の状態程良い仕事をすると言われる。その不安との葛藤が生命力と変化するのだ。積極的に行動する時不安から逆に自信が生まれる。

生徒会の無関心はこれしかない。

後記

人間と人間のレースの間で、ふと我を振り返る。何も残こされていない自分を見つける。このレースの為に自分を賭けてしまった。

サク、サク、サク、空しくのめる。人間とのレースに、自分は高い次元に居るつもりなのだが、サク、サク、サクのめっている。この道を進んで、はたして勝てるのかと不安が襲う。勝利を確認していても、もし私が負ければ、私の道の正しさまで滅びてしまう。勝ったとしても無意味なのに進む。苦しい。まるで私一人に総てが伸し掛かっている。

高い次元。私はそれを歩む。生きていけるかどうかが判らない。サク、サク、と落ちていく。それでもレースに負けられない。

かって人間の枠を外れて生きようとした。枠の煩わしい束縛のない自由に憧れた。しかし今、私一人が人間としてのレールを歩いているようだ。人間を代表して、自分の目標の為に仕方なくレールを外れた人々の為に、歩いているように思える。自分勝手かも知れない。

他人には嫌われるがしたい事をしていられる悪役、その悪役はもう私の役でない。だらしなく、恥しらずの自分を表現しても、悪役になれない。そして、憎まれる善役を演じるのだ。観客さえなく、一人ぼっちで。

私は自分がレースの外に置かれたような気持になる。私が歪みを感じ危機を意識していても、他の人は平気なのだ。間違えた人間が訓れる体験で人を導き、それが正常として通じる社会、そこから育つ新しい世代。私は異常なのだと友は言う。そんな時のめりこむ。サク、サク、サク、ああ、人間よのめりこませるのは、なぜだ。なぜなのだ。

私は一人ぼっちだから友達が大勢いる。良い友達ばかりだ。けれど、私には友達がいないと言って間違いでないはずだ。レースから除外されている恐怖は私だけのものだ。

人間を信じない私だから、人間を信じる事にしている。それでなけりゃ、一人ぼっちで歩けりゃしない。醜くて、貪欲で、弱々しい人間を信じると言うのだ。私を疎外し、私をのめりこませる人間を。たとい嘘でも。

長い歴史の中で、今のレースは何の意味も持たないようでいて、今のレースの勝負が、その歴史を決定するのだから恐い。この本はその決定への問いである。のめりこむ私が、のめりこまない人間に対して布告する宣戦である。私がサク、サク、サク、と落ちていく姿を示す証拠なのだ。私が消滅すれば当然、この貧しき本も消え去る。しかし私が、あの憎むべき何かを消滅した時には、この貧しき本に命が入る。それもレースの結果なのだ。

私は語って、やはり何も語っていない。私は何もかも失って総てをつかもうとする。語る姿には捨てきれない自分があるからだと厳しく責める。そして……あやまる。

レースでの勝利を信じて。終える。

感想があったら、ぜひぶっつけてくれ。

半世紀前　旧講堂で應援團がピケを張り、
教員ストに関わる生徒自治会独自集会をした
なんてこと　思い出す。

大学へ進んだ同年生は……

2018年（平成30年）4月21日（土曜日）　中日新聞

「1968年」―あれから半世紀

「反乱」に至らぬ時代

一九六八年、日本は激しく揺れていた。各地の大学で学園紛争＝㊤参照＝の火が燃え上がり、文化・芸術の世界では前衛の風が吹いた。半世紀が過ぎ、時代は移ろう。そして、今の若者たちは―。

元東京大全共闘本郷学生隊長・自然人類学者
島泰三さん

しま・たいぞう　1946年、山口県生まれ。東京大在学中、安田講堂に立てこもり懲役2年。理学博士。自然人類学者。日本アイアイ・ファンド代表。著書に『安田講堂1968―1969』など。

一九六八年はどんな年だったかというと、米国では四月にキング牧師、六月にはロバート・ケネディ上院議員が暗殺され、ベトナム戦争は泥沼化していました。大学闘争はそういう世界情勢、時代背景の中で起きた出来事です。

学生たちは、変わっていく世界のすべてに対して反対したかったのです。若者は親の世代も含めてあらゆる既存の体制に反対する。本当は自分たちも住んでいる世界と社会の文化的基盤を深く理解した上での反抗でなければ根源的なものにはなりません。しかし、若者はそこまで考えていなかったので、当面は明白な不正に対して反対したのです。

その明白な不正が、東大の場合は医学部生の不当な処分、日大では多額の使途不明金でした。授業料値上げが問題になった大学も多くありました。それぞれの大学の学生たちが、捉えやすい明白な不正に対して声を上げたのが大学闘争の始まりです。間近にあった不正に反抗するという形をとりながら、自分たちの不安と世代的な不満を一気に爆発させた。人口増加時代の青年たちの「反乱」だったと考えています。

私自身は、六八年六月に機動隊が東大構内に入った日、闘争に参加しようと決めました。学問の場に、機動隊という暴力装置が入ってくるとは考えたこともありませんでした。大学当局は学生を虫けらのように扱うのか。そういうことならこちらも容赦する理由はない。その結果は自分で引き受けようと覚悟したとき、すっきりした気持ちになりました。

全共闘世代の人たちが、今も大変な問題が起こっているのに学生たちは何も動かないと憤ってみせることがありますが、それは老人のたわ言です。歴史と社会の枠の中から一歩も外に出ていないので、物事を客観的に判断することができないときに、前の世代として後の世代のふがいなさを慨嘆してみせているだけだと思います。

日大の使途不明金問題では、会計担当の職員が自殺したとされました。そこから日大闘争が始まりました。今、森友学園の問題でも財務局職員が自殺したとされています。実は同じことが起こっているんです。しかし、社会問題として「反乱」にまで至るかどうか、それは時代背景によって違うのです。

（聞き手・越智俊至）

学園紛争　1960年代後半、各地の大学で起きた学生運動。ストライキ、バリケードによる学内施設の封鎖などが行われ、学生と機動隊の衝突も頻発した。東京大では安田講堂を学生たちが占拠。69年1月、機動隊が導入され、多くの学生が逮捕された。学生運動は世界各国で起こり「スチューデント・パワー」という言葉が生まれた。68年5月にフランスで起きた5月革命も当初は学生たちの運動だったが、労働者や農民が加わり、全土に拡大した。

こんな歴史を教えて欲しかった

2018年(平成30年)4月20日(金曜日)　中日新聞

明治150年 1868→2018

「神話」化した日露戦争

半藤

変革の源流

対談　半藤一利さん　保阪正康さん

第2部 1

明治維新から百五十年の今、明治という時代が日本にもたらした〝明暗〟を考える「変革の源流」シリーズを、新年から半藤一利さん(八七)とノンフィクション作家の保阪正康さん(七七)のお届けしています。歴史学者の磯田道史さんのインタビュー(計八回)に続き、今日からは、明治を「明るい時代」とた

日本の憲法や歴史などについて対談する作家の半藤一利さん(左)と保阪正康さん＝東京都千代田区で

はんどう・かずとし　1930年、東京都出身。東京大卒。「文芸春秋」編集長などをへて作家に。「日本のいちばん長い日」「幕末史」「ノモンハンの夏」など近現代史関連の著書多数。

ほさか・まさやす　1939年、札幌市生まれ。同志社大卒。出版社勤務をへて、昭和史を中心とする著述活動に入る。「昭和陸軍の研究」「昭和史七つの謎」など。

―「明るい明治、暗い昭和」という歴史観を持つ人が多い気がします。日露戦争を描いた司馬遼太郎さんの『坂の上の雲』の影響もあるようです。生前の司馬さんと交流があった半藤さんはどう捉えていますか？

半藤　日露戦争後、陸軍も海軍も正しい戦史をつくりました。しかし、公表したのは、日本人がいかに一生懸命戦ったか、世界の強国である帝政ロシアをいかに倒したか、という「物語」「神話」としての戦史でした。海軍大学校、陸軍大学校の生徒にすら、本当のことを教えていなかったんです。

海軍の正しい戦史は全百冊。三部つくられ、二部は海軍に残し、一部が皇室に献上されました。海軍はその二部を太平洋戦争の敗戦時に焼却しちゃったんですね。司馬さんが『坂の上の雲』を書いた当時は、物語の海戦史しかなく、司馬さんはそれを資料として使うしかなかった。

ところが、昭和天皇が亡くなる直前、皇室に献上されていた正しい戦史は国民に見てもらった方がいいと、宮内庁から防衛庁(現防衛省)に移管されたんです。私はすぐ飛んでいって見せてもらいました。全然違うことが書いてある。日本海海戦で東郷平八郎がロシアのバルチック艦隊を迎え撃つときに右手を上げたとか、秋山真之の作戦通りにバルチック艦隊が来たというのは大うそでした。

陸軍も同じです。二〇三高地の作戦がいかにひどかったかを隠し、乃木希典と参謀長を持ち上げるために白兵戦と突撃戦法でついに落とした、という美化した記録を残しました。日露戦争は国民を徴兵し、重税を課し、これ以上戦えないという厳しい状況下で、米国のルーズベルト大統領の仲介で、なんとか講和に結び付けたのが実情でした。

それなのに「大勝利」「大勝利」と天宣伝してしまった。日露戦争後、軍人や官僚は論功行賞で勲章や爵位をもらいました。陸軍六十二人、海軍三十八人、官僚三十数人です。こんな論功行賞をやっておきながら国民には真実を伝えず、リアリズムに欠ける国家にしてしまったんですね。

保阪　昭和五十年代に日米開戦時の首相だった東条英機(※注1)のことを調べました。昭和天皇の側近だった木戸幸一(※注2)がまだ生きていて、取材を申し込みました。なぜ、東条や陸海軍の軍事指導者はあんなに戦争を一生懸命やったのか、と書面で質問しました。そ

爵位欲した軍人たち

保阪

KEYWORDS

※注1　東条英機　1884～1948年。41年、陸相のまま首相に就任し、対米開戦を決定した。44年のサイパン陥落を機に辞職した。戦後、極東国際軍事裁判(東京裁判)でA級戦犯として起訴され、有罪判決を受けて死刑となった。

※注2　木戸幸一　1889～1977年。主に宮中で活動した戦前の政治家。幕末、明治初期に活躍した木戸孝允(長州出身)の孫。内相などを務め、昭和天皇の最側近として実権を握り、戦局が悪化すると和平に動いた。東京裁判でA級戦犯として終身禁錮の判決を受けた。

※注3　満州事変　1931年に日本の関東軍が南満州鉄道の爆破事件を自作自演し、中国東北部への軍事侵攻に踏み切った。翌32年には軍事力を背景にかいらい国家の「満州国」をつくり上げた。国策として27万人の日本人が移住。敗戦時のソ連軍侵攻の混乱の中、逃避行中の8万人が死亡した。残された幼児は残留孤児となった。

※注4　爵位　明治憲法下では公家や大名の家系の他、明治維新の功労者や実業家など、国家に功績があった者は「華族」という特権的な身分とされた。栄典として公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵という5等の爵位を授与された。1947年、現憲法施行により廃止された。

戦争は皇統守る手段

「国家の設計図」なく

半藤

の答えの中に「彼らは華族になりたかった」とありました。満州事変（※注3）の際の関東軍司令官の本庄繁は男爵になっています。東条たちは、あの戦争に勝つことで爵位（※注4）が欲しかった。それが木戸の見方でした。

当たっているなあと思いますね。何万、何十万人が死のうが、天皇の名でやるので自分は逃げられる。明治のうその戦史から始まったいいかげんな軍事システムは、昭和の時代に拡大解釈され肥大化したのです。

「変革の源流」シリーズ第二部、作家の半藤一利さん（八七）とノンフィクション作家の保阪正康さん（七八）による対談の二回目をお届けします。昨日掲載の初回では、日露戦争をめぐり日本の陸軍も海軍も戦いを美化し戦果を誇張する「うその戦史」をつくり、それが日本の誤った軍事システムにつながった過程が明かされました。今日はそこから、近代の日本と戦争の問題を考えます。

―明治から、大正、昭和にいたる歴史の連続性をどう考えますか？

保阪正康さん　日露戦争の本当の部分が隠蔽されてきました。昭和史を追いかけるとそこに行き着きます。明治を高く評価する人は、日本人には良質な精神があると言いたいのだと思うが疑問です。日本には選択肢がいくつもあった。皇后さまが言及した「五日市憲法」（※注1）のように、日本各地で自主的な憲法案が八十いくつもつくられた。しかし、選んだのは軍事主導体制で帝国主義的な道でした。

司馬遼太郎さんが『坂の上の雲』で書いているのは、国家の利益に庶民がどう駆り出され、尽くしたのか、という物語です。明治百年の首相は佐藤栄作氏。安倍晋三首相の大叔父です。明治百五十年は安倍首相です。ともに山口県（長州）選出。今から百年後の歴史家には、百五十年たっても薩長政府が影響力を持っていたと書かれますよ。隠された史料や視点を拾い上げ、もう一度史実の検証をするべきだと思うんです。

薩長の権力闘争について語る半藤一利さん

半藤一利さん　結局、明治政府ができてから西南戦争までの間は、天下を長州が取るか、薩摩が取るかという権力闘争でした。江戸幕府を倒したが、どういう国家をつくろうという設計図が全くなかった。薩摩も長州もね。

保阪　日清戦争で国家予算の一・五倍の賠償を取り、軍人は戦争に勝って賠償を取るのに味をしめました。日露戦争でも南樺太など、いくつかの権益は得ました。第一次世界大戦でも。日中戦争初期の停戦工作が不調に終わったのも、要は政府が賠償金のつり上げをやったからです。

―明治政府は、国民統合のために天皇を持ち出しました。国家の基軸に天皇を置いて立憲君主国家をつくりました。

保阪　明治百五十年を起承転結で考えると、一番分かりやすいのが、明治天皇が「起」、大正天皇が「承」、昭和天皇が「転」、今の天皇陛下が「結」。昭和を語るキーワードの「天皇」「戦争」「国民」は、みな二面性を持っています。天皇は戦前は神格化された存在で、戦後は象徴であり人間天皇。国民は臣民から市民、戦争は軍事から非軍事です。

あえて言えば、天皇というのはどの時代も皇統を守ることを目的としています。目的があれば手段があり、例えば今は宮中で祈る、国事行為を一生懸命するということですが、戦前は戦争も手段だったんですね。一九四一（昭和十六）年四月から十一月までの日米交渉の記録を読んでください。御前会議、大本営政府連絡会議（※注2）、閣議、重臣会議などの記録を丹念に読むと、軍部は天皇に対して「戦争をやらなきゃだめだよ。この国はつぶれるよ。皇統は守れないよ」と強圧的に昭和天皇を脅していることに気付きますね。それで昭和天皇は「戦争しかないのか」と手段として戦争を選んだんです。三年八カ月の太平洋戦争の間をひと言で言えば「悔恨」でしょう。皇統を守る手段として昭和天皇は戦争を選んだ。今の天皇はこの苦しみを深く理解しているはずです。

※次回は五月四日付朝刊で掲載の予定です。

日本の近現代史などについて話す作家の保阪正康さん＝いずれも東京都千代田区で

KEYWORDS

※注1　五日市憲法　明治初期に、国会開設を求める運動の中で全国各地で起草された民間憲法私案の一つ。東京・多摩地方の五日市町（現あきる野市）で1881（明治14）年に起草された。基本的人権が詳細に記されているのが特徴。皇后さまは2013年、79歳の誕生日をめぐる宮内記者会の質問に文書で答え、その前年に視察した草案について「世界でも珍しい文化遺産ではないかと思います」と述べ、強い感銘を受けたことを明かした。

※注2　大本営政府連絡会議　戦時に陸海軍を一元的に統帥するため、大本営と政府代表の間で設置された連絡調整機関。日中・太平洋戦争では、1937年に設置された。44年7月に小磯国昭内閣が成立した後は最高戦争指導会議に改組された。

変革の源流

対談　半藤一利さん　保阪正康さん

第2部 3

改憲案 元首に逆戻り

「象徴」形づくり退位

半藤

㊤憲法と天皇制について語る半藤一利さん　㊦自民党の改憲草案の問題点を指摘する保阪正康さん＝いずれも東京都千代田区で

「変革の源流」シリーズ第二部、作家の半藤一利さん（☆七）とノンフィクション作家の保阪正康さん（☆七）による対談の三回目をお届けします。今回は、憲法と天皇制について、明治から今日に至る問題点を、史実を踏まえて論じます。キーワードとなるのは「象徴天皇」です。

―明治憲法（※注1）下の天皇の位置付けは？

半藤一利さん　西南戦争が終わってから新しい国づくりを始めたときに、プロシア（ドイツ）かぶれの山県有朋（※注2）や周りを囲んでいた優秀な官僚が軍事国家体制をつくります。明治憲法が発布される一八八九（明治二十二）年より十年も先にです。歴史に「もし」はありませんが、大久保利通（※注3）が暗殺されていなければ、こうはならなかったと思います。英仏米などを歴訪し、軍事を政治の統制下に置く、今で言うシビリアンコントロールを学んでいましたから。憲法が制定される前から、日本は軍事国家として歩きだしていたんですね。

だから、憲法の中心に天皇を置くのと同じように、軍事のトップに大元帥（※注4）としての天皇を置いたわけです。明治憲法で天皇と軍事を扱う項目は大ざっぱにいうと二つだけです。「天皇は陸海軍を統帥する」「陸海軍の編成と予算を決定する」。大元帥陸下をトップに立て、一方に憲法の定めるところの内政と外交を主に見る天皇陸下がいる。天皇と大元帥の二つが一つの人格の中にあった、と考えると非常に分かりやすい。

―来年四月末に天皇陸下が退位し、明治以降、四つ目の元号である平成も終わりを迎えます。

保阪正康さん　平成のキーワードは「天皇」と「政治」と「災害」だと思っています。五五年体制が崩壊し、衆院に小選挙区比例代表並立制が導入され、阪神大震災が一九九五（平成七）年に起きました。今の陸下は二つの側面を持っていま す。戦没者の追悼と慰霊という公的行為は昭和の清算。もう一つは象徴天皇という形を何のサンプルもない中でつくったことです。

半藤　昭和天皇は幼少期から軍人教育を受け、十一歳で陸海軍少尉になった。軍人なんですよ、根は。四十四歳の時に戦争に負けて象徴天皇になったといっても、どういう天皇であるべきかは残念ながらなかなか理解できなかったと思います。

それを受けた現在の天皇陸下は、私より三歳下ですが、十一歳の時に戦争に負けて自分の戦争体験はなくても、国民がいかに悲惨な目に遭ったかをよく知っているんです。象徴天皇とは何かを、おやじさんから教えを受けたわけではないんです。皇后さまとともに真剣に考えてつくりあげていったと思うんですね。

かなり歴史を勉強されている方ですから、軍事国家の大元帥、ならびに天皇というのは、どうにでも使われちゃうから危険だということを分かっていると思います。自分は国民統合のために一番良いと思う象徴天皇の形をつくった。これを何とか残し、次の時代も続けることが、皇統を守るためにも一番良い、元気なうちに皇太子さまに譲って、それを見届けたいというのが、今度の退位の動機でしょう。

保阪　自民党の改憲草案は、天皇を元首と位置づけています。天皇自身の意思を考えず、政治家の都合のいいように扱っていいのか。山県や伊藤博文がやった明治憲法と同じじゃないかと指摘できます。意思なんか持つな、存在するだけでよい、というなら、それはそれで論理は成り立つけど、天皇陸下は「それは嫌だ」と二〇一六年八月のビデオメッセージで明かしたわけだから、根本にあるものは黙視できる問題ではありません。

※注1　明治憲法　大日本帝国憲法。伊藤博文らによって起草され、1889（明治22）年に発布された。ドイツ・プロシアの立憲君主制を範とした。天皇を神聖不可侵な元首で統治権の総攬（そうらん）者と位置づけ、陸海軍の統帥や宣戦、講和などの大権を有した。1947年、新憲法の施行に伴い効力は消滅した。

※注2　山県有朋　1838～1922年。幕末―大正期の軍人、政治家。長州出身で、松下村塾に学ぶ。維新後は西欧の軍制を学び徴兵制の導入に尽力。天皇制の下での軍人の心構えを説いた「軍人勅諭」を起草させた。首相を務め、辞任後も元老として大きな影響力を持った。

2018年(平成30年)5月5日(土曜日)　中日新聞

「賊軍」が戦争止めた　半藤

変革の源流

対談　半藤一利さん　保阪正康さん

「変革の源流」シリーズ第二部、作家の半藤一利さん(八七)とノンフィクション作家の保阪正康さん(七八)による対談の四回目をお届けします。最終回の今回は、戦争を始める者と終わらせる者について、そして戦前の歴史が物語る今日への重い教訓について、縦横に論じてもらいました。

―北朝鮮による弾道ミサイル発射や核実験など軍事挑発の前に、安倍政権は安全保障環境の厳しさを強調してきました。

半藤一利さん　北朝鮮に元に戻れというのは無理でしょう。昭和史を勉強すればするほど分かるが、ある程度のところで凍結して話し合うべきだ。安倍さんが言ってきたように圧力一辺倒なんて、とんでもない話だと思います。

保阪正康さん　半藤さんの議論に基本的に賛成なんですが、あえてもうひとつ別な視点を付け加えると、弾圧する側とされる側は、かなり相似形の組織をつくる。今の北朝鮮は、かつて日本の軍国主義が植民地にしていたわけで、金日成の統治は日本のまねをしているという感じはしていました。「絶対王政」が二代三代と続き腐敗していく中で、最終的に人民反乱が起きるのは歴史の教訓なんだけども、今のところ起こりそうもないですね。

「賊軍が戦争を終わらせた」と説く半藤一利さん＝いずれも東京都千代田区で

明治150年　1868▸2018

開戦の責任 後世まで　保阪

開戦の責任は「歴史が続く限り存在する」と訴える保阪正康さん

半藤　日本が一九三一年に満州事変を起こすのですが、その直前の二九年に世界恐慌が起きて、それまで世界の平和をリードしていた米国が、アメリカファースト（米国第一）になって内向きになった。欧州各国も続き、日本はチャンスだと満州事変を起こした。同じことを今やっているんですよ、世界は。

保阪　二〇〇二年、小泉純一郎元首相が訪朝しました。「行って話をしてくる」という姿勢を示したのは、一つの見識だったと思う。話し合いのルートをつくっていかないと。それさえ拒否するとなると、戦争しかないという方向を許容するのか。そういうことになるんだと思うんです。

―戦争を始めても終わらせることは難しい。

保阪　開戦前の大本営政府連絡会議で、戦争終結に関する腹案というのが了承されてます。主観的願望を客観的事実にすり替えている内容で、これが戦争前の日本のすべての判断の根幹にありました。エリート軍人は無責任で、まったく国民のことを考えていない。多くの軍人に会い、官僚の体面の中で始められた戦争だということを徹底的に知った時、彼らは日本の伝統や倫理、物の考え方の基本的なところを侮辱したんだ、その責任は歴史が続く限り存在するんだということを次の世代に伝えたいですね。

半藤　この年になって『世界史のなかの昭和史』という厚い本を出しました。海軍中央にいたのは全部、親独派です。親米派はおん出されている。親独派はほとんどが薩長出身者です。ほんとなんですよ。陸軍も親独派はだいたい薩長です。終戦時の首相で戦争をやめさせた鈴木貫太郎（※注1）は関宿藩、三国同盟に反対した元首相の米内光政（※注2）は盛岡藩、元海軍大将の井上成美（※注3）も仙台藩で、薩長に賊軍とされた地域の出身者です。日米開戦に反対した山本五十六（※注4）も賊軍の長岡藩。賊軍の人たちは戦争の悲惨さを知っているわけですよ。だから命をかけて戦争を終わらせた。太平洋戦争は官軍が始めて賊軍が止めた。これは明治百五十年の裏側にある一つの事実なんですよ。＝おわり

（この連載は瀬口晴義、荘加卓嗣が担当しました）

※注1　**鈴木貫太郎**　1868～1948年。日清、日露戦争に参加し、連合艦隊司令長官や軍令部長を歴任。昭和天皇の侍従長を務めた際、親英米派と目され、二・二六事件で襲撃を受け瀕死の重傷を負う。敗戦直前の45年4月に77歳で首相となり、軍部の主戦論を退け、ポツダム宣言受諾へ導いた。

※注2　**米内光政**　1880～1948年。軍人、政治家。連合艦隊司令長官などを務め、海相として日独伊三国同盟に反対。40年に首相を務めたが、陸軍の抵抗で内閣は瓦解した。44年から再び海相を務め、終戦と戦後処理に当たった。

ブラック・ユーモア

自虐？「書いても消せるシート」

3/27 中日

自民党が二十五日の党大会で、「書いても消せる」ことを売りにした安倍晋三首相のイラスト入りマグネットシートを記念品として出席者に配り、「森友学園を巡る決裁文書改ざんが問題になっているさなかに間が悪すぎる」（議員秘書）と話題になっている。

シートは二枚組で、それぞれイラストの首相の吹き出しに見立てた部分にメモが書けるようになっている。包装には「書いて消せる！」と文字が記されている。大会では司会者が「水性ペンを使うと、家庭や職場でメモとして何度も使うことができる」と紹介した。

インターネット上では「自虐センスが秀逸すぎる」などと、やゆする書き込みが相次いでいる。

自民党大会で配布されたマグネットシート

自民党大会の記念品

お友だちと

佐藤　正明

明治150年 1868→2018

※注3　大久保利通　1830～78年。薩摩出身。西郷隆盛とともに討幕運動の指導者となり、新政府では全国の藩が所有していた土地と人民を朝廷に返還する版籍奉還などを主導、中央集権体制を構築した。77年には西南戦争を鎮圧したが、批判的な士族に暗殺された。

※注4　大元帥　明治憲法下で、陸海軍の統帥者としての天皇の称号。

※注3　井上成美　1889～1975年。海軍兵学校長、海軍次官などを歴任。米内光政、山本五十六と並ぶ親英米派で、日独伊三国同盟に反対した。戦後は神奈川県の三浦半島に隠せいし、地域の子どもに英語を教えて暮らした。

※注4　山本五十六　1884～1943年。駐米武官などを経て海軍次官に。親英米派の米内海相を補佐し、日独伊三国同盟に反対した。対米開戦にも反対したが、連合艦隊司令長官に転出した後は自ら望まぬ対米戦争を指揮し、真珠湾への先制攻撃を立案した。前線の視察中、搭乗機が米機に撃墜されて戦死。

オピニオン＆フォーラム

戦後レジームと9条

押しつけ論超える 吉田の外交戦略と 幣原の不戦思想

25日の自民党大会で、安倍晋三首相は改めて改憲に意欲を示した。昨年5月に首相が提起した「9条を残しつつ自衛隊を明記する」案を受け、自民党内では条文の議論が重ねられている。いよいよ「戦後レジーム」は変わるのか。日本の戦前戦後の政治史を描き、現代への教訓を引き出してきた井上寿一・学習院大学長に聞いた。

――自民党の改憲議論や、25日の党大会をどう見ましたか。

「どこまで本気なのだろうかと思います。9条について安倍首相は、自衛隊は頑張っているのに憲法学者から違憲だと言われるという昨年の憲法記念日の発言を党大会でも繰り返しました。自民党内での議論は、要するに自衛隊を合憲化するためのテクニック論に見えます。また、9条以外の項目は、憲法に盛り込まなくても様々な法律で対応可能でしょう」

「確かに憲法学者はある種のエリート主義というか、憲法がすべての法律の上位法であることに依存し、戦後体制を前提にした空理空論を言っていると見えることもある。そういう人たちに一泡吹かせようという雰囲気は、日本だけでなく世界的に存在しています。その点で安倍首相は非常に適役だから、彼を支持することで留飲を下げる人もいるのでしょう」

――安倍首相は以前から「戦後レジームからの脱却」を唱え、米国に押しつけられた憲法なのだから変えようという姿勢が、改憲論の根底にあります。そもそも戦後レジームとは何でしょうか。

「戦後レジームとは通常、終戦後に首相を長く務めた吉田茂がつくった軽武装、経済優先の親米・通商国家路線を指します。1951年に米サンフランシスコで講和したときに、日米安全保障条約を結んだのも吉田でした」

「同時代にも米国からの自立を求める『対米自立』路線が存在し、反吉田勢力がいました。その延長線上に『戦後レジームからの脱却』があり、いまの憲法改正議論につながってくるのでしょう」

■■

――安倍政権は「対米自立」色どころか、むしろ「対米従属」色が強いのではないですか。

「トランプ米大統領の意向を非常に気にする政権ですね。そもそも吉田は、最初は憲法9条を真面目に受け止め、国連に期待していました。しかし当時から今に至るまで常設の国連軍は存在しない。いずれ国連に日本の安全保障を委ねるのだけれども、それまでは国連安保の理念の下で、何らかの二国間協定で守ってもらおう。その相手は事実上米国だけであり、9条が規定する日本の安全保障を現実的に考えたときに、日米安保を結ぶ以外になかった」

「ただ、安保条約に伴う日米の行政協定、地位協定の不平等性は、当時から吉田側近の条約局長が認めていました。日本の国際的な地位の向上につれて、改正交渉に手をつけていなければいけなかった。それは本来、国家主権や国家の自立に人一倍敏感な保守勢力が取り組むべき課題です」

――対米協調はせざるをえない一方で、押しつけられた憲法という見方を安倍首相は維持しているようです。最近も「GHQ（連合国軍総司令部）によって作られた今の憲法」と発言しました。

「新憲法の制定過程で首相だった幣原喜重郎もその次の吉田も、終戦直後に憲法改正に消極的だったのは事実です。英米協調派の外務大臣や外交官だった彼らにとって帝国憲法は悪いものではなく、問題は軍部だった。特に吉田は、いずれ憲法を改正して軍隊をきちんと持ちたいと思っていたでしょう。ただ、実際の政治は別の話であって、そう単純にはいかない。敗戦国は戦勝国の言うことを聞かざるをえない、新憲法は降伏条件だと吉田は割りきっていました。外交的感覚、戦略ですね」

「これは学術上の定説と言っていいと思いますが、幣原も吉田も戦争放棄、憲法9条を受け入れたのは天皇制を存続させたいと考えたからです。対日理事会を構成するソ連やオーストラリアは、天皇制に対して非常に厳しい考え方をしていました。それゆえ天皇制を残す一方でその代わり戦争しないと明確にする必要があった。対する連合国軍最高司令官のマッカーサーは、占領統治を円滑にするのに天皇制を利用しようとして、日本側と利害が一致した。こうして憲法9条と象徴天皇制はセットになって残ったのです」

■■

――押しつけ憲法論と一緒に持ち出されるのが、日本の指導者などを訴追した東京裁判（極東国際軍事裁判）で、勝者の裁きという批判が絶えません。

「『戦争調査会』という本を昨年出しました。戦争調査会は幣原の発案で、45年から国家プロジェクトとして戦争原因を探ろうとした組織ですが、あまり知られていません。東京裁判が46年に始まり、対日理事会やGHQによって1年に満たず解散させられます。しかし特筆すべきは、東京裁判の前に、日本人が自主的に戦争原因の追及をしようとしていたことです。その新しい歴史的な事実の重みを知ってもらいたかったし、東京裁判が勝者の裁きか文明の裁きかという論争を超え、自立的な戦後日本がそこから始まったとも考えました」

――新憲法の制定時期ですね。

「幣原の一次史料はあまり残っていないのですが、公文書である戦争調査会の記録には、幣原が新憲法をどう考えていたのか、率直な肉声が含まれています」

――やはり消極的なんですか。

「今の憲法とほとんど同じ『憲法改正草案要綱』の公表が46年3月6日で、戦争調査会の第1回総会が3月27日でした。そこで幣原が語った内容には、戦争放棄の理念を自分のものにしたいという強い思いが表れていました。私にはとても新鮮でした」

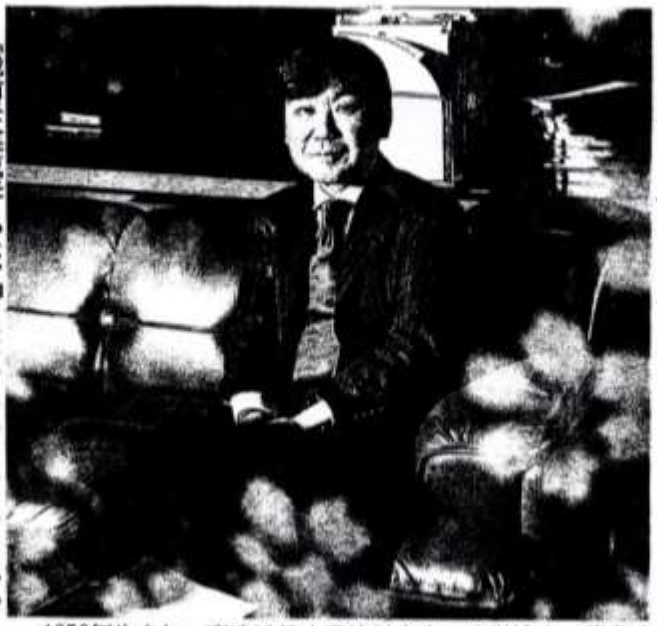
「幣原は46年の段階で、戦争放棄・戦力不保持が夢の理想として批判されることを予想していました。それは日本が『単独に寂しく独りで』進む道だとも。しかし彼は原子爆弾に触れ、何百万の軍隊も灰燼に帰す時代が来るだろうと言う。核時代の到来を予測していたのです。そのうえで、そんな時代には日本についてくる国もいずれ現れるかもしれない、という趣旨を述べています」

――マッカーサーの回顧録には憲法9条に体現されている「戦争放棄」は幣原が46年1月24日の会

国家構想なき 自民党の改憲案 魅力に乏しい

憲法を考える

学習院大学長
井上（いのうえ） 寿一（としかず） さん



1956年生まれ。専攻は日本政治外交史。法学博士。著書は「吉田茂と昭和史」「戦争調査会」など多数。内閣府公文書管理委員会委員。

「戦前を全否定すると、押しつけ憲法論に対抗できません」＝桜が描かれた学長室の絵画に映る姿、鬼室黎撮影

談で言い出したとあります。

「最近再び注目されているようですが、その前後のGHQと日本政府のやり取りを史料で見ていくと、実証は難しいです。ただ、幣原は3月までに、戦争放棄の理念のもとで国家再建をする、という考えにだんだん傾斜していったのではないか。そして、将来再び戦争が起こりそうになったときのために、なぜ日本が戦争をしたのかという記録を残しておこうとした。その点から幣原にとって新憲法は押しつけではなく、主体的な選択であり、核時代という新時代に向けた彼の思想だったのです」

――そうした幣原の思想や、吉田の戦略と比べ、いまの改憲論はどう見えますか。

「憲法論議は本来、国家構想の話だと思います。憲法を変えることは国のかたちを変えることで、それ自体は悪くない。ではどう変えるのか。仮に9条を変えて自衛隊を合憲化するのをよしとするなら、その先に日本をこうしたいというビジョンが必要です。しかし、あまり見えてこない」

■ ■

――自民党内の議論では、9条に自衛隊を明記する案のほかに、戦力不保持を定めた2項を削除するという意見も出ていました。

「明記案でも2項削除案でも、問われるのは日本の安全保障環境をどう整えるのか、日本が安全になるのか、ということです。本来は安全保障の構想をまず出し、それに基づいて憲法をこう変える、という順序でなければいけない。そのとき、日米安全保障条約をどうするのか。日米安保から脱却し、自立的な安全保障政策を作るのか。誰もが中国の軍事的な脅威を感じているときに、日本は自主防衛で自国を守れるのか。必要なのはそういう議論です」

「ただ、安保法制でテクニック的な議論はほぼ完成してしまった。だから、安保法制を整えた人たちは『憲法改正以外は全部できました』と言ったのです」

――集団的自衛権は憲法解釈の変更でいいかもしれないけれど、憲法の条文を変えるのなら、その上位概念というか、安全保障構想をちゃんと示せと。

「そうです。とりわけ来年は、天皇陛下の代替わりの年です。私は、代替わりが国内だけでなく、国際的にも大きな意味を持つと考えます。代替わりの儀式には、本当にたくさんの方々を海外からお呼びして、日本が外交の場にもなる。憲法改正とともに平成から次の時代になる日本がどっちの方向を向いているのか、世界から注目されるでしょう。代替わりの儀式をチャンスと受け止めて、改めてこういう国を目指すという『ポスト平成』の国家構想を示したいですよね。しかし、自民党の今の憲法改正案からはそれが見えません。あまり魅力がない、というのが正直な感想です」

（聞き手 編集委員・村山正司）

2018年（平成30年）4月28日（土曜日） 中日新聞

紙つぶて

憲法記念日

前田（まえだ） 和敬（かずのり）

五月三日は憲法記念日です。国民は憲法とどう向き合うべきか、それぞれのやり方で静かに自問自答してみるのも、たまにはよいかもしれません。

僕自身は統治主体意識という言葉をもう一度かみしめてみようと思います。主権者である国民は統治される客体ではなく統治主体である、その意識を持とうという意味です。憲法学者の佐藤幸治先生が九〇年代の政治改革、地方分権改革、行政改革、経済構造改革、司法制度改革など一連の統治構造改革を貫く理念として言及されてきました。

反対が統治客体意識。文字通り、統治される客体の身に甘んじる国民の精神的態度を指します。

百年の計を考えて日本国憲法の見直しに手をつけるなら、統治構造改革こそテーマとして取り上げるべきだというのが長年の持論でした。国会のあり方然り、憲法に触らないと解決できないほどこの問題の根は深いからです。

それから、統治主体意識の発露として憲法前文をみんなで考えてみる参加型の運動があってもいいとも思っていました。どのような国でありたいか、小学生からお年寄りまで全国各地で郷土色豊かな自由で個性的な自主自立の起草運動がほうはいとして起こればなお面白い。たとえば、お国言葉で書いてみるとか。明治時代の自由民権運動のような熱気が今の時代にもほしいところです。

（日本生産性本部理事長）

日本経済の旗手も、次ページの同じ次世代経済人の日本 JC とは極めて対照的ですね

発した先に

壇上でマイクを握った女性が叫んだ。

「ニッポンを変えるのは――？」

一斉に声が上がる。

「オレたちだ――!!」

昨年7月、横浜市内で開かれた年1回の「サマーコンファレンス(サマコン)」。公益社団法人・日本青年会議所(日本JC)主催の会議に、各地域の青年会議所(JC)のメンバー1万人以上が集まった。

JCは国際的な活動で、日本JCは1951年に創立した。「修練」「奉仕」「友情」を掲げており、ボランティア活動や選挙での公開討論会の実施、祭りの運営など社会的な活動をしている。

このサマコンでは政治や経済について議論が交わされ、主な議題の一つが、これまで取り組んできた憲法改正だった。招かれて登壇した安倍晋三首相は言った。「JCのような全国組織でリーダーシップをとって議論していただきたい」

改憲を目指す日本JCの今年の事業計画だった「目指せ全国3000万人賛成投票プロジェクト」。朝日新聞が入手した内部資料には、プロジェクトの10事業が記されている。

ネット上で注目を集めるため、「憲法改正賛成」と書かれたボードを男女に持ってもらう「美女図鑑」「イケメン図鑑」。自衛隊に感謝を伝える歌などの音楽の拡散による賛成派の投票率向上。「憲法を考えるフォーラム」「憲法改正賛成シール作成」「フェイスブックによる発信」「憲法漫画」といった事業も並ぶ。

「憲法を変えたくないって言ってるヤツはバカ」。日本JCが姿を隠してこう発信し、後に削除、謝罪した「保守キャラクターツイッター・宇予くん」も、その事業の一つだった。

公益社団法人・日本青年会議所(日本JC)がひそかにつくった「保守キャラクターツイッター」の「宇予くん」は今年の元日から毎日のように発信した。

「自民党改憲案を読んでの感想が『何としても戦争をしたいんだ』だと。間違いなく狂ってると」「左翼の論理はメチャクチャだと。洗脳って怖いと」

憲法について語った一般市民や国会議員、一部メディアの名を挙げ、誹謗中傷を繰り返した。

2月末。日本JCが関与しているのではないかとの疑惑がネット上で飛び交い、日本JCが認めた。

JC運動は日本で1949年に始まり、「共に向上し合い、社会に貢献しよう」という理念で各地で誕生した。参加資格は20～40歳で、会員は企業の役員ら約3万6千人。日本JCは、全国に約700ある地域のJCから出向した約2100人で構成され、様々な活動にあたる。

2005年と12年に軍隊保持などを盛り込んだ独自の憲法改正草案を作り、憲法を考える事業に取り組んできた。昨年は全都道府県で討論会を開催。そこでは改憲、護憲それぞれの立場で討議する形式を取ることにしていた。

□　□

日本JCの今年の活動の一つだった「目指せ全国3000万人賛成投票プロジェクト」。その内部資料に「打ち合わせ議事録」がある。「憲法改正推進委員会」の男性幹部(39)が昨年、ウェブマーケティング会社社長に尋ねたとされる内容が記されている。

――バズりやすい(注目を集めやすい)ものは

「いい意味でバズるのは難しい」「予算がなければ炎上系で拡散させる」

――ツイッターをどう生かすか

「右の発言、毒舌の発言で炎上させる」「派手なこと、あほなことをしなければ100万単位はない」

検討段階とみられる資料にも「対左翼を意識し、炎上による拡散も狙う」と書かれていた。

都心のビルの一室。記者が、ウェブマーケティング会社を訪ねた。

30代の男性社長は取材に「100万円で3千万人のアクセスを稼ぐにはどうしたらいいかと相談は受けた」と話した。ただ、「3千万人という目標を見直したほうがいいと、きっぱり言った」と具体的な助言は否定した。

□　□

今年に入り、プロジェクトの資料が各地のJCに届いた。

西日本のあるJCは取り合わないことを決めた。メンバーの男性は内容を読み、疑問を抱いた。「姿を隠した発信は一方的に意見を押しつけることになる」。これまでJCは、意見が割れる問題で双方が意見を言い、人々に考えてもらう場を提供してきた自負がある。炎上を狙った「宇予くん」について「注目を集める手法を追い求めるあまり暴走した」と言う。

日本JCで活動経験がある男性は「よく徹夜で議論していた。議論おたくの集団だった」と振り返る。今回の件は「異論に向き合わない姿勢が根底にあるのではないか」と考える。

ネットメディアに詳しい東京工業大の西田亮介准教授は「政治的主張のある団体が一般の人を装って発信すると、世論の一つと誤認され、無警戒に人々の考えに入り込む恐れがある」と指摘する。姿を隠して発信する手法は、大量の匿名アカウントで候補者への中傷や支持が拡散された16年の米大統領選で見られた。西田准教授はこうした手法が広がれば、言論のゆがみが大きくなると懸念する。

姿を隠したツイッターで政治的な影響を及ぼそうとした「宇予くん」。憲法改正推進委員会の男性幹部は取材に「何もお答えできません」と繰り返した。

日本JCは2月末と3月初め、ホームページ上で「特定団体からの発信だと個人レベルでの議論が活性化しづらいと考えた。企画段階では、憲法改正に関する論点や歴史、愛国心など保守的なことを面白くつぶやき、拡散させるというものだった」と説明。「宇予くん」の誕生を許した理由は「個人アカウントを使用したことで内部のコンプライアンスチェックが行き届かなかった」とし、この憲法事業を白紙に戻すとした。今回、改めて取材を申し込んだが、「回答を控えさせていただく」とした。

内部資料では、改憲に賛成する人をどれだけ増やせるか、各事業の年間目標を設けていた。「宇予くん」は約470万人だった。

この連載は伊藤嶺莉、大谷聡、金山隆之介、貞国聖子、沢木香織、鈴木春香が担当します

「みる・きく・はなす」はいま

「議論おたく」匿名で暴走

素性は明かさず主張拡散

ヨランダちゃん（9歳）の胸のシンボルは？私も飯田水引製の同じシンボル胸に付けてます

「私には夢がある。銃のない世界だ」

全米100万人 命の行進

【ワシントン＝白石亘】米南部フロリダ州の高校で二月、十七人が殺害された銃乱射事件を受け、高校生の呼び掛けで銃の規制を強化するよう訴えるデモ「私たちの命のための行進」が二十四日、首都ワシントンをはじめ各地であった。同年代の悲劇に心を痛めた高校生らが駆けつけ、米メディアによると、参加者は全米で百万人に上った。

銃規制強化の転換点にしようと、事件が起きた「マージョリー・ストーンマン・ダグラス高校」の生徒たちが企画。主催した高校生は米タイム誌の表紙にも取り上げられるなど、大きな関心を集め、「この二十年間で最も強力な銃改革の草の根グループ」（有力ニュースサイト、ハフィントンポスト）とも評される。

米NBCテレビによると、ワシントンでは約八十万人が参加。繰り返される銃撃事件に「もうたくさん」「学校で死にたくない」などと書かれたプラカードを掲げ、規制強化に及び腰な議員たちを「落選させよう」と気勢を上げた。

主催者の一人の同校生徒エマ・ゴンザレスさんは壇上で「わずか六分二十秒間で十七人の命が奪われた。他人任せにせず、あなたたちの命のために闘う」と宣言した。

強い政治力で規制に反対する全米ライフル協会（NRA）に怒りの声を上げる参加者が多く、ワシントンの高校生ダリル・クラインさん（一七）は「政治家は若者の命よりNRAからもらうお金が大事なのか」と訴えた。

「STOP NRA」と書かれたプラカードを掲げ、クラスメートと行進したジョージア州の高校生ラリエル・ドライトンさん（一七）は「私たちが声を上げれば、彼らも変わらざるを得ないと信じている」と話した。

24日、米ワシントンで行われた銃規制強化を求めるデモで、ペンシルベニア通りを埋め尽くした市民＝米報道博物館「ニュージアム」から撮影（共同）

キング牧師の孫演説

キング牧師＝AP・共同

【ワシントン＝共同】銃規制強化を求めた二十四日の米首都ワシントンでのデモで、人種差別撤廃に取り組んだ黒人公民権運動指導者、故マーチン・ルーサー・キング牧師の九歳の孫娘ヨランダ・リネー・キングさんが「私には夢がある。銃のない世界だ」と演説した＝写真、AP・共同。

キング牧師が一九六三年八月のワシントン大行進で「私には夢がある」と人種差別のない日が来ることを願う有名な演説をしてから約五十五年。特設ステージに登壇したヨランダさんを、デモ参加者たちは喝采で迎えた。

ヨランダさんは「祖父には夢があった。四人の幼い子どもたちが肌の色ではなく人格によって評価される国に住めるようになることだ」と述べた上で「私には夢がある。銃暴力はもうたくさん。銃のない世界にするべきだ」と訴え、会場を沸かせた。